

III メモ帳より——貧しき時代の貧しき人々のこと

ある金話

六月の雨が降ったり止んだりしていた。頼りなくなる程静まり返った昼さがり。矢のように飛び交う燕だけが、この静寂にやっと生気を与えていた。

細い田舎道が、一方に小高い山塊を抱えこみ、一方に段々になつた狭い水田を見下しながらうねうねと続いている。赤土がかったこの細道の水溜りをピチャピチャ踏みながら、十七歳位の娘を頭にした三人姉弟が、みすぼらしい身なりで黙って歩いてくる。弟妹に挟まれて歩いている頭の娘は、古新聞に包んだアヤマやアジサイや山百合の一束を抱えている。そして時々鼻を花に近づけては、その香りを楽しんでいる。彼女の着ているレイン・コートはすっかり変色して、白が黒ずんだ黄色になっている。左のポケットのところ、接着剤で穴をふさいだらしい不器用な細工のあとが見える。

連れの弟は十歳位で、ヨレヨレの霜ふりの洋服とズボンをはき、ハダシで歩いている。妹は十三、四にもなるうか、体つきは姉よりガッチリして見えるが、その身なりは一段と姉に劣っている。二人の姉が丸々と肥えているのに反し、末の弟は青白くやせていて、見るからに栄養の足りなさを感じさせる。

弟「姉ちゃ、こんだいつ帰ってくんのか？」

姉「わがんねなア、んでも、なるたけ暇めつけて帰ってくつかんな。んでもわがんねなア、いつになつが」

弟（生き生きした表情で）「姉ちゃ、こんだ何買ってきてくれる？」

姉（姉らしく）「うん。何がええんだ、ヨシは？」

弟（しばらくもじもじ、やがて思い切つて）

「姉ちゃ、オレ何でもええけど、洋服がええな」

姉（つき放すように）「洋服？、馬鹿言つてらア、ヨシは」

弟（もとの淋しげな表情に戻る）「んだらええや」

姉（急に追っかけるように）「んでもヨ、ヨシよ。い

つかはきつと買ってきてやつかんな。待つてんだと、ヨシは！」

ここで会話は止んだ。姉はまた鼻を花に近づけた。妹は顔を真っ赤にしながら姉と弟の会話を聞いていたが、ここで急に微笑んだ。彼女の足の親指がズックの破れ目から顔を出した。

三人は黙って歩いていく。雨は小止みなく降つて、道の傍の農家の生け垣からアジサイの花がほの白くにじんで見えた。